人見ずはわが袖もちて隠さむを

―― 万葉集巻三の二六九番歌の解釈 ――

河野頼人

万葉集巻三の二六九番歌、

阿倍女郎屋部坂歌一首

人不見者我袖用手将隠乎所焼乍可将有不服而来来

の解釈について、沢瀉久孝博士「人見ねばわが袖もちて」（『万葉古径　三』（昭和二十八年）所収）に先行の諸説を詳しく御紹介の上、

人見ねば我袖もちてかくさむをもえつつかあらむ着ずて来にけり

と訓み、「もゆ」の主語を「みづから」とし、「第二、三句はそのみづからの思ひを袖につつむ事にならう。さうなると『着ずて』がまたみづからの『袖』である事がわからう。……袖を胸に着たのである」、両腕をあてて胸を包んだのであるといい、

「さてかうして『着ず』を袖につつまぬ事だとすればそれはどういふ事になるか。人目はばからず歎く事である。思ふ人の名をロばしる事である」

と、すると初句はおのずから「ヒトミネバ」と訓むことに決定されるのであるといい、

「人目のない坂であるから憚らず色に出て歎くのである」（三七～八頁）

と説き、口訳に、

「人が見ないので――自分の袖でかくしもしようものを――もゆるままにまかせもしようか。――袖につつむ事もしないで来たことだ」（四〇頁）

とある。しかし、「人が見ないので……かくしもしようものを」といいながら「みづから」のことであるのに「袖につつむ事もしないで来た」では一首の構成に論理的に調和を欠くのではないか。この点を解決されたのであろうか『万葉集注釈』巻三（昭和三十三年）においては、

人見ずは我が袖もちて隠さむをやけつつかあるらむ着せずて来にけり

と、第一句、第四、五句の訓を改め、第一句を、

「第二三句につづけ『かくさむ』でうけるとすれば、ヒトミズハと訓む事が最も自然である」

そして、「我が袖もちて隠さむを」について、

「私は前に作者の思ひと見たのであるが、みづからの思ひを袖に隠さうといふのに『我が袖』といふのはことごとしく、『我が』は相手を予想しての言葉で、隠すのはみづからの思ひでな

くて、山と見る方が穏かである。従つて上も人見ずは、でよい事になる」

と「隠さむ」の対象は「山」であるといい、第四句について、

「山の事となればヤケと訓んだ方がよい……山の焼けるのに対して同情し、人目がなかつたらかうかういふ事もしてやりたい、といふのであれば『人見ずは』でよい事になる。然るにさうして山の事にするとなるとアラムでは不都合である」

から字余りの異例にはなるけれど、「前後の首尾を生かす為にアルラムと訓む事はやむを得ない」、そして、第五句も亦字余りになるが、

「単なる事実の叙述と見るよりも作者の詠歎がこめられたものと見るべきであり、第四句の字余りに対して結句もわざと字余りにしたとも考へられ……」

といい、そしてつづいてその「考」に、

「山の焼けるを、人間の燃ゆる思ひに見立てて、人が見なかつたら自分の袖にも包んでやらうものを、よそに見て通つたので、まだ焼けつづけてゐるだらうか。袖を着せずに来た事だつた。といふ風に云つたので……」

とある。「山の焼けるを、人間の燃ゆる思ひに見立てて」とあるに注意したいと思う。そして、

「人が見ないなら、苦しさうに燃える火を自分の袖でかくさうものを、袖に包みもしないで来たことだ。まだ焼けつづけてゐることであらうか」（一一一～四頁）

と口訳されている。

私は、大略『万葉集注釈』によってこの一首を理解したいと思うのであるが（ただし、第四句は「燃えつつかあるらむ」と訓みたい）、「まだ焼けつづけてゐることであらうか」とのみある口訳ではそれが山であるのか人間であるのか今一つ明確でない点がもどかしく、私は、以下、「見立て」をもっと表に出して読んでみたいのである。

小島憲之・木下正俊・佐竹昭広氏、日本古典文学全集『万葉集』（昭和四十六年）に、初句「人見ずは」について「ズハは事実に反することを仮定する用法」といい、第四、五句は「焼けつつかあらむ」「着ずて来にけり」と訓み、それぞれに注して、

「アルラムというべきところを、音数の関係でアラムといったもの。山を焼く火を詠んだのであろう」

「着せかけてやるようなものを自分は着ないできた、の意か。歌意に不明な点があり、後考を待つ」

とあり、口訳に、

「人が見ていなかったら　わたしの袖で　山焼きの火を隠してやるのだが　焼けつづけていることであろうか　あいにく着せかけてやるようなものも着ないできた」（二一一～二頁）

と、「着せずて」を「着ずて」と訓む違いのみでほぼ『万葉集注釈』の説を襲い、青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎氏、新潮日本古典集成『万葉集』（昭和五十一年）には右の『万葉集』と同訓で第四、五句については、

「……私のこの袖で隠してあげたいのだけれど、この屋部の坂は、これからも赤茶けた色を見せ続けるのでしょうか。今までもずっと地肌をむき出しにしたままでいたのね。……」（一の一七四頁）

と、「焼けつつかあらむ」を「赤茶けた地肌」と解釈されているの

である。

そして、最も新しい注釈である西宮一民氏『万葉集全注　巻三』（昭和五十九年）は、後者の解釈に従い、「考」に、屋部の坂は、『日本後紀』大同元年三月、桓武天皇崩御の条の童謡及び『日本霊異記』下巻、第三十八にある、

大宮に直に向かへる野倍能佐賀いたくな踏みそ土にはありともの「ヤベノサカが大宮に直接通じているということが歌われている」ことを根拠に、諸説はあるが『万葉集講義』に説く奈良県高市郡明日香村の、大官寺趾の小山あたりとする説に従い、

「この歌は藤原京時代すなわち持統・文武天皇時代からまだ藤原宮にいました元明天皇の時代の成立であると考えてよいと思う。そして、おそらくそのヤベの坂はその利用度の多さのゆえに踏み荒されて道の両側の壁は赤茶けた地肌を露出するような痛々しさを呈していたのではなかったか。だから、民謡で『いたくな踏みそ』と歌われるようになったものであろう」

といい、日本古典文学全集及び新潮日本古典集成『万葉集』に同じく、

人見ずは我が袖もちて隠さむを焼けつつかあらむ着ずて来にけり

と訓み、

「人がもし見ていなかったら、ていねいに私のこの袖で隠してあげようものを。それもできないから、この屋部の坂は赤茶けた地肌をむき出しにし続けることでしょうか。それにしても本当に今まで地肌を露出したままで来たのですね」（八九～九〇頁）

と口訳されている。しかし、右の後者二例に「焼けつつかあらむ」を「赤茶けた色を見せ続けるのでしょうか」「赤茶けた地肌をむき出しにし続けることでしょうか」とあることには賛成出来ないのである。些か揚げ足取りめいて恐縮であるが、右の西宮氏の「考」に素朴な疑問を呈してみれば、「踏み荒されて」を承ける「道の両側の壁は赤茶けた地肌を露出する」の「壁」であるが、「両側の壁」が踏み荒されることは理屈からいってもありえない筈であって、この坂はよく用いられ踏み荒されて赤茶けているがこの坂の両側の壁も亦荒れ、赤茶けた地肌を露出しているの謂いではなかったのか。口訳には「壁」はなく、「屋部の坂は赤茶けた地肌をむき出しに」とあるのである。そして、「ていねいに私のこの袖で隠してあげようものを」といわれているのであるが、この坂のある道に限らないが、普通道には、「道の長手を繰り畳ね」（狭野弟上娘子、巻十五の三七二四）とあるように恰も長い布地ででもあるかのごときものが連想され、縦しその坂がさして長くないものであったとしても、その坂の道を袖でもって覆い隠すということには感覚的に無理があるのではないかと考えるのである。

思うに、「屋部坂」を直接「我が袖もちて隠さむ」の対象であるとみる必要はなく、そして、又、『万葉集注釈』に「山の焼けるを、人間の燃ゆる思ひに見立てて」とあったが、現に焼けている山はここには想定しなくてもいいのではないか。一首の上に「山」は具体的には表われてはいない。作者は「屋部坂」を越えて行く時に「焼け」を連想する可能性もあったということではなかったか。「坂」は作歌の場所であると思うのである。『万葉集私注』（昭和二十四年）に、後述もするようにこの坂は「平群郡屋部郷から、河内高安郡の八部

に越える、所謂志比坂と見るべき」といい、

「屋部はヤベであるが、恐らく本来はヤカベであつたらうから、此の歌は坂の名のヤカベを『焼け』に連想して、興じ作つた歌と見るべきである」

といい（ただし、「ヤカベ」について後に引用の論文「屋部坂」に一応の根拠は示してあるのであるが、恣意的で従い難い）、つづいて、

「『坂とは言ひながら胸の内が焼けて居てはかはいさうだ。その焼ける思ひを私の袖でかくしてもやりたかつたが、坂のことであるから、衣も服せることがかなはず来てしまつたので、相かはらず焼けて居ることであらう』といふ意味と思はれる。作者自身の類似の経験が内部に存したがために、坂の名も作歌動機となり得たことは勿論言ふまでもないことであらう」（第三巻の六三頁）

と、新潮日本古典集成『万葉集』・『万葉集全注　巻三』の先蹤をなす考えをみることが出来るのであるが、それはそれとして、「作者自身の類似の経験が内部に存した」とあるに心惹かれることである。更に西宮氏が前引の「考」の終に、

「寓意があるかも知れないが、具体的には分からない。第三句・第四句切れで、屈折した表現となっている。ともかく、何か寓意がありそうだとの配慮もあってか、二六七～二六九番歌の三首で一組みとしたものであろう」（九一頁）

と、「寓意」とあることに左袒したいと思う。西宮氏は二六七・二六八番歌を、

志貴皇子の御歌一首

むささびは木末求むとあしひきの山のさつ男にあひにけるかも

長屋王が故郷の歌一首

我が背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり妻待ちかねて

と訓み、二六七番歌の「考」に、

「近江の歌の後に並び、異常な題材の歌であるという点からは、略解の寓意説がもっともらしく響いてくる。そして、大津皇子など、高い地位を望み身を滅ぼした者に対する寓意とでもみない限り、なぜこのような歌をここに載せたのか分からないと思う。なお、二六九番歌の〔考〕参照」（八七頁）

と、歌の排列についても考慮し、二六八番についても具体的な言及があるわけではないが、「何か寓意があるらしくもある」（八八頁）とあるのである。

私は、この二六九番歌は譬喩歌として解釈することによって正解に近づくことが出来るのではないかと思う。かくみる時、岸本由豆流『万葉集攷証』に、

「一首の意は、心に物をふかく思ひて、やる方なきを、思ひにもゆといふより、火も見え、けぶりも立るものの如く、いひなして、見る人のなかりせば、わが袖を以て、もゆる思ひのけぶりをかくしてんものを、今は、人もしりにたれば、もゆるままにてかあらん、しかも、その袖もてかくすべき服をさへ、多くきずしてきにければ、いかにともせんかたなしと也。この歌は、さるべきよしありて、ものへゆくとて、屋部坂を越しに、故郷に思ふ事ありて、それを思ふ思ひに、むねもこがるるなり。さて、よく〳〵考ふれば、かくの如く、事もなくきこゆるを、代匠記よりはじめて、考にも、久老が考にも、この歌心得がた

しとて、あるは訓誤り、あるは文字を改めなどせられしは、いかなる事ぞや。略解は、いふまでもなし」（万葉集叢書第五輯の七四頁）

とある解釈がよく真を摑んでいると思う。ただし、も一つ明確を欠くが、「もゆる思ひのけぶりをかくしてん」の「思ひ」を「わがもゆる思ひ」と「わが」の意にとるのであるならばこの点については従うことが出来ない。

以下、譬喩歌として解釈してみたい。

先ず、題詞の「屋部坂」について、『万葉集の旅』（昭和三十九年）には「奈良県の中であろうが所在未詳」（上の三〇六頁）とあり、諸注は前に引用の『万葉集講義』の大官寺趾の小山あたりとする説に従うのであるが、土屋文明氏は一旦はこれによられていたのであるが（「屋部坂」、『続万葉紀行』昭和二十一年）、「天平十九年の法隆寺資材帳に見える平群郡屋部郷」に注目、

「平群郡の屋部郷は法隆寺、法輪寺の西方、平群川両岸の地であることが知られ、そこから志比坂を越えると、河内の八部に出ることが知られる。そこで考へれば、その志比坂こそ、屋部坂であるといはねばなるまい。そしてそれは結局今の信貴山越の道であらう。峠が八部坂なるため、東西の坂本に屋部八部を名とする部落が存するのであらう」

と、そして、「坂としても亦、万葉時代の主要交道路線としても申し分ない」（「屋部坂補正」、同右一七一～四頁）といわれ、『万葉集私注』の記述はこれによられている。私は、この信貴山越の道に従いたいと思う。

猶、『万葉集私注』の「ヤカベ」から「焼け」を連想することは、『万葉考槻落葉』に、「屋部の部は、祁の誤にはあらぬにや」（「紀の国の、八鬼山坂」とする）といい、

「拾遺集に、ちはやぶる神もおもひの、あればこそ、年経て富士の、山ももゆらめ、とよめる意にひとしく、屋祁山にもゆる火を、おもひの火にとりなし、人し見ずば、わが袖もちてかくしてんものを、いかなるおもひのあればにや、かくあらはに、もえつつかあらむ……」

とあることに繋がっている。因みに、日本古典文学大系『万葉集』の補注に、「屋祁坂」の「祁」はケ甲類。「焼け」の「け」はケ乙類の仮名でなければならず、「題詞と歌とを直接関係づけることは出来ない」（一の三四七頁）といわれている。そして、『万葉考槻落葉』、結句は「魚彦の本」によって改め、「不服而座来」――「この山の木立も生ず……はだか山にてあるをいへるなるべし」（万葉集叢書第四輯の二八～九頁）。更に一言ことわっておけば、眼前に山が焼けているという解釈は『増訂万葉集全註釈』の外は殆んど取っていない。

しかし、縦し「屋祁坂」を認め、かつ、坂の名に近似音の「焼け」を連想してみることが許されるとしても、敢えて焼山と取らないでもいいのではないか。寧ろ、私は、「屋部坂にしてよめる歌と意得へし」とのみいい、「焼け」を眼前の景と取っていない『万葉代匠記』初稿本が、「人不見者ワガソデモチテカクサムヲヤケツツカアラム不服而来来」と訓み、

「……遠き旅なとに出とて、屋部坂にいたりてこゆる時、此坂をこえはててかなたに下らは、ふるさとさへ見えしとおもひてかへりみる時、さらぬたにはかなき女の心に、ここをかきりと

なかめやれは、おもひにこひに胸もやくるはかりかなしけれは、さすかにそれも人めをはちらひて、衣たにあまたもてこましかは、あつくとりきてむねの火のもえ出とも、つつみかくして行へきに、衣もあまたはきてこれは、やくともやけなから得かくさてやゆかんと、わかれきてふるさとさへ見えすなるへきおもひの、やるかたなさをよめるなるへし」(『契沖全集』第一巻の六〇八～九頁)

と、右に「坂」を越えることに一首の発想の中心を置き、「おもひにこひに胸もやくるはかりかなしけれは」とあることが詳しく参考になるのである。精撰本は右より簡潔ながらほぼ同文。そして、右に加えるに結句の「着ずて来にけり」を譬喩と解釈してこそ歌の趣意に近づけるのではないかと思うのである。ただし、「おもひの、やるかたなさ」をわが「おもひの……」とは取らないこと、『万葉集攷証』にいったことに同断である。

先ず、「屋部坂」の「坂」について、所謂、伊藤博博士の説かれる「見納め山」をここにみることが出来ると思うのである。博士が、柿本人麻呂の「従二石見国一別レ妻上来時歌」(巻二の一三一～三)の「高角山」の表現性は「別れ来ぬれば」の存在と不可分に関わり、

『高角山』は妹の里の果てにある山、いいかえれば、人麻呂が本格的に帰京の人とならねばならぬ異郷の妹の里との境の山、もっといえば、人麻呂が妹(妹の里)への決定的な別れを告げねばならぬ見納めの山という意味を内封する詩句であろうと思われる」(「石見相聞歌の構造と形成」、『万葉集の歌人と作品上』二八一頁)

といわれていることを参考にしたい。この驥尾に付していえば、巻六の九六五～八番歌の遊行女婦児島と大伴旅人の唱和四首の九六六番歌の左注、

「大宰帥大伴卿、大納言に兼任して、京に向ひて上道す。此の日馬を水城に駐めて、府家を顧み望む。時に卿を送る府吏の中に、遊行女婦あり。其の字を児島と曰ふ。ここに娘子、此の別るることの易きことを傷み、彼の会ふことの難きことを嘆き、涙を拭ひて、みづから袖を振る歌を吟ふ」

とあるこれを承けて旅人が、

大夫と思へるわれや水茎の水城の上に涙拭はむ(九六八)

とうたう「水城」は、僅か十メートルに足らぬ高さの土手ながらこの上に立って顧み児島との別れを惜しむ男の振舞が顕著であり、「見納め山」としてのあり方を右の「高角山」と同じくしているといってよいと思うのである。

右の意味で「坂」をみる場合、『岩波古語辞典』に「さか(境・界)」を注して、「サカ(坂)と同根」といいその補足的説明に「古くは、坂が区域のはずれであることが多く、自然の境となっていた」とあることなど参考になるのであるが、以下例をあげてみれば、

息の緒にあが思ふ君は鶏が鳴くあづまの坂を今日か越ゆらむ
(巻十二の三一九四)

は、

当麻真人麿の妻の作る歌
わが背子は何処行くらむ奥つもの隠の山を今日か越ゆらむ(巻一の四三)

と同趣の歌であるが、前者の「あづまの坂」について、

「アヅマは第一に逢坂の関以東、第二に遠江国以東、第三に箱

根山以東の三段階がある」（日本古典文学大系『万葉集』三の三二四頁）

とあるが、その坂が「うすひの坂」（『万葉代匠記』初稿本、『契沖全集』第三巻の五八一頁）、「足柄御坂」（同精撰本、同右）その他何れであるにしろ、否、寧ろ抽象的な坂であることによって一つの境として捉えられた「坂」の概念はいちじるしいと思うし、後者、「坂」の字こそ無けれ名張の山を越えれば大和の国から伊賀の国であると、もしこの歌に詠まれている「わが背子」の立場でいうならば、愈々他国に入るのだと、ここで改めて振り返られるものは自分の過ごして来た世界であり、その世界を共有して来たわが妻のことであったのである。

そして、

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ

（巻十四の三四〇二）

は、結句、「はっきりとお振りになった。（私はそれが見えて嬉しかった）」（日本古典文学大系『万葉集』三の四二〇頁）と解釈しなければならないところであるが、「日の暮に」を実景とみず枕詞であると考えるにしろもとより「背なのが袖」が現実に妻の目に見える筈のものではなく、「わが振る袖を妹見つらむか」（巻二の一三二）にそのまま通う詩の目が捉えた「さやに振」る袖であったのであり、これに対し男は、

足柄のみ坂に立して袖ふらば家なる妹はさやに見もかも（藤原部等母麿、巻二十の四四二三）

といい、又、三四〇二番歌の「碓氷の山」を「坂」とみてよいこと、

ひなくもり碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（他田部子磐前、同の四四〇七）

東路の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後はあひぬとも

（巻十四の三四七七）

の第一首にみることが出来、三四〇二番歌も含めて右にあげた四例は「坂」を越える時の歌、取り分け四四〇七番歌は「越えしだに」――越える時に（春日和男氏「碓氷の坂を越えしだに」五八頁、「万葉」第十七号・昭和三十年十月）「妹が恋しく忘らえぬ」といい、三四七七番歌は「越えて去なば」「我は恋ひむな」と、それぞれ改めて後に残して来た妹のことを恋しく思い描き、正に二六九番歌の発想に通う世界そのものがあるのである。

すなわち、この屋部坂を河内の国へ越えんとする阿倍女郎の胸中にふつふつと湧き溢れて来るもの、それは四四〇七番歌の「妹が恋しく忘らえぬも」そのままに「我袖用手将隠乎所焼可将有不服而来来」の未練ではなかったか。

如上、題詞の「屋部坂」を手がかりに考えて来たのであるが、題詞を歌の解釈に及ぼしてよいこと今更ことわる必要もないとは思うが、二六九番歌のすぐ後にある二九一番歌、ただし、これには歌詞の中にも「勢の山」とありはするが、

小田事の勢の山の歌一首

真木の葉のしなふ勢の山賞ばずてわが越えぬるは木の葉知りけむ

について、小田事は伝未詳であるが、『万葉集講義』に、「この勢能山をわが今超えむとて通れば、この山には真木の葉が勢盛んに、若々しくしなやかなる姿にて茂りあへるを見る。われはこの若々しくしなやかなる姿を見て、わが思ふ人の姿を聯想し忍びかねて、こ

こを通るが」（巻三の二四七頁）とあることを敷衍していえば、愈々「勢の山」も越えんとして切なく郷愁を覚え初めるころ、この「勢」に「背」を、そしてそこから「妹」を連想、かつ、紀の川をはさむ対岸には妹山もあって沁々と国に残して来た妻を偲ぶ作者であるのであり私たちも共感を覚えずにはいられないことである。

二六九番歌も亦、これと同じ心境にあるといってもよいのではないか。以下述べていきたいが、先ず、第五句から。

「不服而来来」に誤字説のあることは必要に応じてふれて来ているのであるが、私はこの本文で解釈出来ると思う。沢瀉博士が「着ずて来にけり」を「着せずて来にけり」と改訓しておられそれに従うこと、又、「山の焼けるを、人間の燃ゆる思ひに見立てて、人が見なかつたら自分の袖にも包んでやらうものを、……」といわれていることは既に引用しているが、この「見立て」に関わる「着す」について。「着せる。よそわせる。身につけてやる」（『時代別国語大辞典　上代編』）の意であることはいわずもがなのことであるが、譬喩歌のこの歌は、「自分の袖にも包んでやらうものを」を、私は、更に共寝もさせず、共寝を許すこともしないでと解釈したいと思うのである。

因みに、第五句の誤字説の一つであるが、折口信夫博士は、

人覓かば、吾が袖もちて隠らむを。燃えつつかあらむ。眠ずて来にけり

と「眠ずて」と訓まれている。ただし、口訳には、

「わたしは、此頃は一向寝ないでゐます。かうして焦れてゐねばなりますまいか。人がわたしに恋ひをいひ入れたら、恥しさに、袖で隠れてゐるだらうに。其くせに焦れてゐる。（屋部坂で作つた歌といふ序は、屋部王に贈つた歌の誤りであらう）」（『口訳万葉集』、『折口信夫全集』第四巻の九五頁）

とあって、私のいわんとする趣旨で「眠る」が用いられているのではない。

さて、右に関わる「着る」「着す」の例をあげてみれば、

託馬野に生ふる紫衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり（「譬喩歌」、笠郎女贈二大伴宿禰家持一歌、巻三の三九五）

紅に衣染めまく欲しけども着てにほはばか人の知るべき（「譬喩歌」、寄衣、巻七の一二九七）

と、この二例は同想の歌であり、前者の「着る」が、いまだ恋の思いを遂げないうちに、共寝もしてはいないのにとあると同様に後者も亦共寝と解釈してよいと思うし、

衣しも多くあらなむ取り易へて着なばや君が面忘れてあらむ（「譬喩」、寄衣喩思、巻十一の二八二九）

と、二六九番歌と同じくこれも亦作者が女であればこそ「衣しも多くあらなむ」と「衣」を譬喩とし、そしてその「衣」を取り易えて着ることが出来るものならば片時もわが念頭を去ることのない恋しいあなたをも忘れることが出来るであろうと、「着る」に男女の交情――共寝の意を汲み取ってこそ一首の真意に近づけると思うのである。そして、

杜若咲く沼の菅を笠に縫ひ着む日を待つに年そ経にける（「問答」、巻十一の二八一八）

は、必ずしも共寝とは断定出来ないとしても、例えば、日本古典文学大系『万葉集』の頭注に、「結婚できないうちに、年がたったことの比喩」（三の二四八頁）とあることが参考になるし、又、

秋の夜は暁寒し白栲の妹が衣手着む縁もがも（大伴宿禰池主、巻十七の三九四五）

は、越中守大伴宿禰家持の館に集うて宴した時の歌の一首であるが、この「衣手着む」は、都から遠く離れた地にある男の歌であり、妹が袖別れし日より白栲の衣片敷き恋ひつつぞ寝る（「正述心緒」、巻十一の二六〇八）

と、「妹が袖」に「別れし日より」男は「衣片敷き」一人寝をするとあると並べてみても共寝を意味していることいちじるしい。

以上、あらあらとではあるが、「着ずて」――共寝しないで、「着せずて」――私との共寝を許さないでの意に解してよいと思うのである。猶、「着す」は後述の「隠す」にも深く関わる。

そして、この「着せずて」は第四句と関連するところが多いのであるが、「所焼乍可将有」を沢瀉博士は、『万葉古径』に「もえつつかあらむ」と訓み、『万葉集注釈』に「やけつつかあるらむ」と改めておられることは既に引用しているのであるが、「もゆ」と「やく」について、『万葉古径』に、「焼」の文字は「ヤク」であるが「モユ」と訓んだ例もあるといい、「ヤク」「モユ」の自他四種の用例を照合され、

あま少女らが焼塩乃（ヤクシホノ）念（オモヒソ）曽所焼（ワガシタゴコロ）吾下情（巻一・五）

夜昼といはずかぎろひの心所燎管（ツツ）なげくわかれを（巻九・一八〇四）

の「焼」「燎」は「モユ」と訓むべきことを説き、「モエツツカアラム」が妥当であるといい、「もゆ」の主語は「今の場合は『みづから』と断ずべき」といわれていることは冒頭に引用した。それはそれとして、右の引用の二例、「吾下情」「心」を伴って「もゆ」と訓まれていることが理解出来るのであるが、『万葉集注釈』では、既に引用しているように、「山」のことであるから「ヤケ」と訓み、かつ、「アラムでは不都合で」、字余りの異例にはなるけれど「アルラムと訓む事はやむを得ない」として「やけつつかあるらむ」と改訓、そして、「らむ」について、

『也未爾也伊毛我（ヤミニヤイモガ）古非都追安流良牟（コヒツツアルラム）』（十五・三六六九）、『山能桜者（ヤマノサクラハ）何如有良武（イカニカアルラム）』（八・一四四〇）の如くアルラムとならねばならぬ。『将有（レモナク）』はアラムと訓むのが通例であるが、『都礼毛無（ケフモカモ）将有人乎（アルラムヒトヲ）』（四・七一七）、『今日毛鴨（イツノウラミニ）磯之浦廻爾（シルシレテアルラム）乱而将有』（七・一一五五）の如くアルラムと訓まれたと思はれる例もあるから今もアルラムと訓む事は許される」（一一三頁）

と。更に例をあげてみれば、

秋田刈る仮盧をつくり盧して有藍君（アラヒミヲ）叫見むよしもがも（巻十の二二四八）

敷栲の衣手離れて吾を待つと在盤子（アラムヒコラハ）等者面影に見ゆ（巻十一の二六〇七）

しましくも独りあり得るものにあれや島のむろの木波奈礼（ハナレテ）安流（アラム）良武（巻十五の三六〇一）

相思はず安流良（アラムラ）牟伎美（ヒキミヲ）乎あやしくも嘆き渡るか人の問ふまで（大伴宿禰池主、巻十八の四〇七五）

等は仮名書例であり、そして、

相思はず将有（アラム）児（コユ）故玉の緒の長き春日を思ひ暮さく（巻十の一九三六）

海原の路に乗りてやわが恋ひ居らむ大船の由多（ユタ）爾将有（ニアラム）人の児

ゆゑに（巻十一の二三六七）

橡の一重の衣うらもなく将有児故恋ひ渡るかも（巻十二の二九六八）

等の「将有」も四音に「あるらむ」と訓まねばならぬところであるが、「らむ」の意味について、「現在の事態を推量する……。目前に見えていない事態を『今頃はさぞかし〜〜のことであろう』と思いやる気持である」（「基本助動詞解説」、『岩波古語辞典』）、「句や文の末尾にきて、その句または文の表現する事態そのものの存在を、表現者自ら確かめることができないので、一抹の疑念を残して、推量的に言う」（『時代別国語大辞典　上代編』）とあることが当て嵌まるのである。猶、「アルラムというべきところを、音数の関係でアラムといった」は既に引用している。二六九番歌は、歌の上に「山」は表現されてはいない。敢えて「山」にこだわらないでいいのではないか。「屋部坂」を越えんとして顧みられたもの、それが「所焼乍可将有」であり、かつ、私は譬喩歌とみているのであり、従ってここは「やく」ではなく「もゆ」と訓まねばならぬところである。眼前の情景ではなく、遠く離れている人の胸の思いであると考えているのである。

「やく」も「もゆ」も、譬喩的に、情熱の盛んなさま、思い焦がれる意に用いられているのではあるが、胸の思い――「心」と関わる例は「もゆ」の方が一般的ではないか。

山上憶良の「老身重病経ㇾ年辛苦、及思ㇾ児等ㇾ歌」に、

……年長く　病みし渡れば　月累ね　憂ひ吟ひ　ことごとは

死ななと思へど　五月蠅なす　騒く児等を　打棄てては　死には知らず　見つつあれば　心波母延農……（巻五の八九七）

大伴家持が病のために「殆臨ㇾ泉路」み、都の妻を恋い「越中国守之館」で詠んだ歌に、

……玉桙の　道をた遠み　間使も　遣るよしもなし　思ほしき言伝て遣らず　恋ふるにし　情波母要奴……（巻十七の三九六二）

そして、同じく家持が「思ㇾ放逸鷹」いて詠んだ長歌の一節に、今更招き寄せる手立てもなく、

……言ふ為方の　たどきを知らに　心爾波　火佐倍毛要都追思ひ恋ひ　息づきあまり……（同の四〇一一）

といっているのであるが、第一例は、いっその事死んでしまおうかと思うのだけれど、目の前に「騒いで居る子供を捨てては、死ぬことさへも出来ず、其の子供等を見て居れば心中は焼かれる如くである」（『万葉集私注』第五巻の二三〇頁）と、離れている者に対してではないが「心は燃えぬ」といい、第三例は異性ではないにしろわが許から逃げ去った鷹を思えばわが「心には火さへ燃えつつ思ひ恋ひ」と、切ない思いをいうこと第二例のそれと同断である。

そして、仮名書きではないが、「心」を伴う例として、

情庭燎而念杼うつせみの人目を繁み妹に逢はぬかも（「寄物陳思」、巻十二の二九三二）

は「もゆ」と訓んでいいと思うし、又、

妹が名もわが名も立たば惜しみこそ布士の高嶺の燎乍渡（「寄物陳思」、巻十一の二六九七）

について、「或歌」には初句が「君が名も」、第四、五句が「不尽の高嶺の燎乍毛居」となっているのであるが、両首とも「高嶺の」までが「燎」の序詞となっており、この一字は恋人を思う己れの心

を富士の高嶺のように燃えていると「もゆ」と訓むべく、類歌に、

吾妹子に逢ふよしを無み駿河なる不尽の高嶺の焼管香将有（「寄物陳思」、巻十一の二六九五）

があり、この「焼」も右の例に倣い「もゆ」と訓む。ところで、この二六九五番歌、『万葉集注釈』に、「もえつつかあらむ」と訓み、「いつも心が燃えつづけてゐることであらうか」（巻十一の三九一頁）と訳されている。この解釈だけでは「あらむ」は己れであるか相手のことであるのか不明であるが、沢瀉博士は二六九番歌の解釈の中に、二六九五番歌の「例でもわかるやうに、アラムと訓めば、作者みづからが燃ゆる思ひをつづける事か、といふ事であるべき」（一一三頁）といわれ己れのこととされているのであるが、私は、ここも亦『万葉集注釈』の二六九番歌の第四句の訓に倣い、「逢ふよしを無み」を承ける「燃えつつ」は「吾妹子」であってこそ相応しく、「吾妹子」の心を「燃えつつかあらむ」と推量していると訓みたいところである。

二六九番歌に戻れば、「燃えつつかあらむ」は、作者が後に残して来た人の心を思い遣っていっているのであり、「わが袖もちて隠さむを」はその燃えている心の火をであったのである。

次に「隠さむ」の「隠す」が、見えないようにする、見られないようにするの本来の意味で用いられている例の多いことは当然であるとして、中で、例えば、

長谷の斎槻が下に吾隠在妻あかねさし照れる月夜に人見てむかも（一に云はく、人見つらむか）（巻十一の二三五三）

の第三句は隠してある妻であるが、大切なものを人目から隠し見せたくないという気持は、わが思いを隠すことにも通じるところがあると思うのである。一例をあげれば、

沖つ藻を隠障浪五百重波千重しくしくに恋ひわたるかも（巻十一の二四三七）

は「寄物陳思」の一首。「五百重波」までは序であるが、幾重にも幾重にもしきりと恋いつづけている己が心中の思いを「沖つ藻」に譬え、それを「隠さふ波」、すなわち、人目には隠れて見えぬわが「恋ひわたる」心であるのである。「隠す」には大切に包み隠す意があるのである。そして、

わが袖に霰たばしる巻隠消たずてあらむ妹が見むため（「冬雑歌」、巻十の二三一二）

はわが袖に大切に巻き入れて隠し、「妹が見むため」解けやすい霰を「消たず」におきたいと詠じているのであるが、「わが袖に」霰を「巻き隠し」てと、これは対象となるものをやさしく包み隠さんということに通じ、この心情は、二六九番歌の「わが袖もちて隠さむ」と正に相重なっていると思うのである。

そして、「隠す」に関わる「袖」を更に敷衍して、二六九番歌の第二、三句に男女の交情を読み取ったとしてもあながち牽強の批難を受けないでもいいのではないか。ついては、

我妹子が袖乎憑而真野の浦の小菅の笠を着ずて来にけり（巻十一の二七七一）

を読んでみたい。「奇物陳思」の一首であるが、『万葉代匠記』精撰本に、

「袖ヲ憑テトハ、若雨ノ降コトアラハ妹カ衣ヲ借テ袖ヲ打被テ帰ラムト思ヒテ急ク余リニ空ノオホツカナキニモ菅笠ヲタニ取敢ス来ツルソトヨメリ」（『契沖全集』第三巻の四〇八頁）

といい、『万葉考』は、

「来にけりといへば妹が家へ到てその道の程小雨にぬれたるをもて戯にかくいへるか」（『増訂賀茂真淵全集』巻一の三一五頁）

と、この「戯」を支持する説も多く、『万葉集注釈』にそれらをまとめて、「雨が零らなくともさうした戯れ心で詠まれたとも見る事が出来る」（巻十一の四五四頁）といっておられるのであるが、私は、日本古典文学大系『万葉集』頭注の「大意」に、

「吾妹子の着物の袖（でかくしてもらうこと）をたのみにして、真野の浦の小菅で編んだ笠をかぶらずに来てしまった」（三の二三八頁）

とあることに心惹かれるのである。『万葉集』にはまだ「肘笠」の語はない。右の解釈の括弧に入れてある部分は、『万葉代匠記』に、もし雨が降ったならばその時は妹の衣を借りその袖を打ち被て帰らむという意の延長線上にはない。といわんよりは寧ろここは、括弧の中は更に譬喩として、袖に隠してもらう、すなわち、暖かく包み労ってもらうことを頼みにして雨に濡れるのも厭わず吾妹子の許までやって来たのであると解釈すべきところであると思うのである。のみならず、ここは、共寝を頼みにしてといい換えてもよいところと思っている。更にいえば、折からの雨を契機として、苦労してわざわざやって来たのであると己れの思いを相手の心に訴えているのではないか。

そして、「着せずて」に述べたことに重複しないようにしたいと思うのであるが、そこにあげた二六〇八番歌に付け加えていえば、「袖」そのものも共寝に関わらせて解釈すべき歌も多い。「片敷く」に直接結びついている例は、丹比大夫が亡妻を悲悼む挽歌の一節に、「袖片敷きて　独りかも寝む」（巻十五の三六二五）とある一例のみではあるが、

紀伊国にして作れる歌二首

わが恋ふる妹は逢はさず玉の浦に衣片敷独りかも寝む
玉くしげ明けまく惜しきあたら夜を袖可礼而独りかも寝む（柿本朝臣人麻呂之歌集所出、巻九の一六九二～三）

の二首をみても、又、後者、「ころもで」を「袖」と表記していることなど注意したいのであるが、以下、「袖」にこだわって例を一、二をあげてみれば、

……妹と吾　手たづさはりて　朝には　庭に出で立ち　夕には
床うち払ひ　白たへの　袖指代而　さ寝し夜や　常にありける
……（「秋相聞」、巻八の一六二九）

しきたへの袖易之君玉垂の越智野過ぎゆく亦も逢はめやも一に云ふ、越智野に過ぎぬ（「挽歌」、柿本朝臣人麿、巻二の一九五）

白たへの　袖指可倍氐　靡き寝し　わが黒髪の　ま白髪に　成りなむ極み……（「挽歌」、高橋朝臣、巻三の四八一）

等に見る「袖さし交ふ」は、第一例は大伴家持が大伴坂上大嬢に贈った長歌の一節、第二例は夫を失なった妻の思いを、第三例は「悲二傷死妻一」する夫の挽歌であるが、後者の二例、夫婦として共に過ごした日々の典型が正に「袖さし交ふ」であったのであり、「袖をまく」も亦同断。例えば、巻十二の「正述心緒」に、

うらぶれて離れにし袖叫又巻者過ぎにし恋い乱れ来むかも（巻十二の二九二七）

とあるは共寝そのものであり、そして、

白たへの袖(そでに)触(ふれて)而夜わが背子にわが恋ふらくは止む時も無し

（「寄物陳思」、巻十一の二六一二）

は、「わが背子」の袖に触れてからはと、「袖」は男女の交情そのものとして詠まれているのである。

その「袖」で「隠す」といっているのである。「隠す」はやさしく労わり包み隠すことであり、既述のごとく「隠す」の対象は一首の表面に明らかではないのであるが、心燃ゆる思い、そして「らむ」とそれは想像される相手の燃ゆる思いであった筈であり、それを「わが袖もちて」女らしくやさしく「隠さむ」と思ったのであるが人の目があったのでそれもかなわず、ついに「袖」を「着せずて来にけり」と、「隠す」は「着す」と殆んど同義に用いられ、その繰り返しに、屋部坂を越えるにあたって今更のごとくに「人見ずは」と取り返しのつかぬその時の情景を想起し心を後に残している作者の思いが読む者に迫って来るのである。「着せずて」には回想する作者があり、「けり」に込められた詠嘆はそのようにみてこそ深い。

以上、私はこの一首を譬喩歌としてみたいと思い些か縷述して来たのであったが、最後に、もし人の目がなかったならば相手の思いも入れてよかったものを、今もこの私を思って心に燃えつつあることであろうか。それにしても共寝を許さないで来てしまって心残りなことだと解釈し小文の結論としたいと思うのである。

又、蛇足ながら、かくみてこそこの二六九番歌がここに排列されていることの必然性も説明することが出来るのではないかと思うことである。しかし、これに政治的背景を関わらせることまでは今は考えていない。

――北九州大学文学部教授――